

農書は現代の暮らしの知恵

農書を現代に生かす 15の視点

『日本農書全集』全72巻の分類テーマとその概略

特産 (45・49巻・他)

江戸時代農業が米を中心とした田農業とするのは多量でない。日本列島各地に産出された特産物は隆盛を極めた。(数字は収録巻数。本特集二七頁下欄の収録文書の一覧を参照)

農産加工 (50・53巻)

農産加工の農書は多い。50巻でさきさきからの製糖法、松前の輸出海産物の製法、製菓を、51巻で酒造を、52巻で漬物、豆腐、麹、醤油、味噌、製塩を、53巻で塗物、紙すき、綿麻、生糸、樟脳、製炭を扱う。現代の地域資源による産業起源を示唆するものも多大である。

園芸 (54・55巻)

元禄以降の町の経済的台頭を背景にし、園芸趣味が都市庶民一般に広がった。一方で武家屋敷や寺社庭園の盛衰を、上方から多量の庭師が江戸に集まってきた。この視点から『川嶋次郎』大隈園学、石川理次郎、大隈園学、石川理次郎の助の文書とともに、下村に残る『自らの時』ときめ文書「備定書」の類収録。

畜産・獣医 (60巻)

獣医書として解体新書ならぬ「解馬新書」があった。他に、家畜の鍼灸術の手引、飼育と畜産論なども多岐多彩である。ベトナムとしての犬、鶏などの飼育手引も収録。

農書目録 (11・42・44巻)

農事日誌は近世各村の暮らしを具体的に知るまたたくまに具体的な。田畑と家畜や養蚕、耕地と用水や採草地との関係、季節の移り変わりや年中行事、信仰・遊

本 救災 (18・68巻)

近世は薬物学である本草学が庶民に広く足をおろした時代であり、一方で飢饉に際した救済植物の栽培・貯蔵記述した文書の出版が盛んになった。『民備備荒録』(18巻)『備荒本草図録』(68巻)をはじめ、飢饉に備える実用書を集めた。菓種の国産化を勧める『菓草の木作植書付』(68巻)も収録。

地域農書 (1・11・15・41巻)

村にあって自らの農事体系をもとにして書き残されたもので、多くは肉筆または写本として現存している。これらはその地で栽培・飼育された作物全般にわたり、生活と生産が一体にたがって記述されたものであり、総論書とも称してよい。地域固有の農法の記述であると同時に、近世庶民の暮らしについての二次資料として貴重である。本全集の過半を占める。



第55巻『羽花鶴伝』



第68巻『備荒草木図』

探る。米沼澤の稲養技術防技術、対馬の焼酎(木庭作)論などの基本文書を解説した記録『廻在之日記』、長州藩農民が上方から江戸を回った日記『東道農書増』、心学や不二道の信者のネットワーク、比較試作の記録、各種の「往來物」(農村寺子屋のテキスト)など多彩な文書を収録。なか、20巻では稲歌による農普及の名著『水津歌集』もある。

農村振興 (63巻)

商賈経営の浸透にともなう、18世紀後半から19世紀前半にかけての農村の振興、復興に際したの人の動きが詳らかにされる農書記録である。『農書』(26・71・72)

災害復興 (23・67巻)

富士山・奥州山・雲仙山・醫部の噴火、善光寺平・伊賀の地震、江戸湾・伊勢湾の津波、荒川・高梁川の洪水などの現物の、すくわて人間模様を記録。東西の飢饉の状況を知る一つの文書であるから、災害史の重要なリールな書として、復興に際しての人の動きが詳らかにされる農書記録である。『農書』(26・71・72)

本 救災 (18・68巻)

近世は薬物学である本草学が庶民に広く足をおろした時代であり、一方で飢饉に際した救済植物の栽培・貯蔵記述した文書の出版が盛んになった。『民備備荒録』(18巻)『備荒本草図録』(68巻)をはじめ、飢饉に備える実用書を集めた。菓種の国産化を勧める『菓草の木作植書付』(68巻)も収録。

農書目録 (11・42・44巻)

農事日誌は近世各村の暮らしを具体的に知るまたたくまに具体的な。田畑と家畜や養蚕、耕地と用水や採草地との関係、季節の移り変わりや年中行事、信仰・遊

本 救災 (18・68巻)

近世は薬物学である本草学が庶民に広く足をおろした時代であり、一方で飢饉に際した救済植物の栽培・貯蔵記述した文書の出版が盛んになった。『民備備荒録』(18巻)『備荒本草図録』(68巻)をはじめ、飢饉に備える実用書を集めた。菓種の国産化を勧める『菓草の木作植書付』(68巻)も収録。

農書目録 (11・42・44巻)

農事日誌は近世各村の暮らしを具体的に知るまたたくまに具体的な。田畑と家畜や養蚕、耕地と用水や採草地との関係、季節の移り変わりや年中行事、信仰・遊



第58巻『小川鳴鶴合戦』

び、ムラの共同作業など興味はつきない。肝煎の手になる羽後、畑作地帯の武蔵と下野、米単作の越中、加賀、村医者の書いた三河、寺子屋師匠を兼ねた美濃、稲と綿の河内、綿中心の備後、砂糖をついた讃岐、自給自足で暮らす薩摩の日記に11巻の肥前「野口家日記」を加え、三編を収録。

絵巻 (26・71・72)

掛物、奉納絵、屏風、掛軸、繪巻、給馬、時絵、彫刻、焼物、漆器、織物などに表わされた農耕描写に目をむけられる。26巻の『農書図録』は京都市近郊農村の一年の巡りの暮らしと作業の図録で、三百年の歳月を隔てた往時の農村庶民の姿が直接伝わってくる。

学書の農書 (12・14・69・70巻)

学書の農書は、著者当初から農業技術の改良や農業知識の普及を意図し、多くは都市の出版業者が木版本として刊行・販売した資料として貴重である。本全集の過半を占める。

地域農書 (1・11・15・41巻)

村にあって自らの農事体系をもとにして書き残されたもので、多くは肉筆または写本として現存している。これらはその地で栽培・飼育された作物全般にわたり、生活と生産が一体にたがって記述されたものであり、総論書とも称してよい。地域固有の農法の記述であると同時に、近世庶民の暮らしについての二次資料として貴重である。本全集の過半を占める。

『日本農書全集』収録農書一覽

- 全35巻(編集委員) 山田龍雄・飯沼二郎・守田志郎・岡夫光
- 【地域農書】として区分。カッコ内には成立地と、テーマ性の強いものについてはテーマ名を記した。
- 【地域農書】
- 第1巻 耕作術(陸奥、奥民図彙(陸奥、老農置土産並びに添日記)羽後、菜種作り方取立々条書(羽後・特産)除虫之法(羽後) ●4,900円
 - 第2巻 軽邑耕作抄(陸奥)、遺言(陸奥)、地下掛諸品留書(岩代)、農民之勤耕作之次第書(岩代)、亀尾崎圃案(松前) ●4,800円
 - 第3巻 農業要集(下総・学者の農書・宮負定雄)、草木撰種録(下総)、開荒須知(上野・開発と保全)、菜園温古録(常陸) ●5,000円
 - 第4巻 耕稼春秋(加賀) ●5,000円
 - 第5巻 農事遺書(加賀)、耕作早指南種稽歌(若狭・農法普及)、農業家訓(若狭)、農務所作村々寄帳(加賀・越中・能登) ●4,800円
 - 第6巻 私家農業談(越中)、農業談拾遺雜録(越中) ●4,800円
 - 第7巻 農稼業事(近江)、農業余話(摂津、学者の農書・小西篤好) ●5,300円
 - 第8巻 家業伝(河内) ●4,500円
 - 第9巻 家業考(安芸)、農作自得集(出雲、神門出雲福羅郡反新田出情抄書(出雲) ●4,500円
 - 第10巻 清良記(親民鑑月集(伊予)、農術鑑正記(阿波)、阿州北方農業全書(阿波) ●5,300円
 - 第11巻 窮民夜光の珠(筑前・特産)、園圃備忘(筑前・園芸) ●3,000円
 - 第12巻 肥前、野口家日記(肥前・農事日誌)、九州表虫防方等関合記(加賀、農法普及) ●4,300円
 - 第13巻 農業全書・巻1~5(全国対象、学者の農書・宮崎貞) ●5,300円
 - 第14巻 農業全書・巻6~11(全国対象、学者の農書・宮崎貞、貝原家軒) ●5,200円
 - 第15巻 広益国産考(全国対象、大蔵永常、学者の農書) ●5,200円
 - 第16巻 除蝗録(全・後編(全国対象)、農具便利論(上・中・下(全国対象、綿蘭要務) ●5,200円
 - 第17巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第18巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第19巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第20巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第21巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第22巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第23巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第24巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第25巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第26巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第27巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第28巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第29巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第30巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第31巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第32巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第33巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第34巻 百姓伝記(全) ●4,200円
 - 第35巻 百姓伝記(全) ●4,200円

【農書全集】



第25巻『農書図録』